

静岡水技研研報(49): 34-36, 2016  
Bull. Shizuoka Pref. Res. Inst. Fish. (49): 34-36, 2016

## 抄 録

### シラス漁船によるデータ収集とその利活用

小林憲一\*

平成26年度水産工学関係研究開発推進会議 漁業生産技術部会・水産業システム研究部会-合同部会  
～漁船活用型の水産音響調査を目指して～報告書, 55-66 (2014)

静岡県ではシラスは船曳網により漁獲されており、年間水揚量は6,000～8,000t、水揚金額は30～50億円と全国上位3位以内に入る主要な漁業であるが、漁獲量の変動が大きいことや燃油高騰等により収益が減少傾向にあると感じている漁業経営体は多い。これに対し、平成23年～25年に(独)中央水産研究所、北海道大学、宮崎県、大分県、高知県、徳島県、静岡県、(株)ソニックの共同研究「沿岸シラスの最適漁場探索ツ

ルの開発」により、シラス漁船データ収集ツールの開発、シラス出現情報提供ツールの開発、シラス漁場探索指針の開発等を行った。今後は、既存の技術を活用することも含めて漁業者のためになる技術を迅速に漁業現場に「実装」するための取り組みをさらに進める事が重要である。

\*水産技術研究所資源海洋科

### Successful production of functional Y eggs derived from spermatogonia transplanted into female recipients and subsequent production of YY supermales in rainbow trout, *Oncorhynchus mykiss*

Tomoyuki Okutsu<sup>\*1</sup>, Shinya Shikina<sup>\*2</sup>, Takashi Sakamoto<sup>\*3</sup>,

Mamiko Mochizuki<sup>\*4</sup>, and Goro Yoshizaki<sup>\*3</sup>

Aquaculture, 446, 298-302 (2015)

養殖業において重要な全雄群の作出(単為生殖技術は、これまで性転換魚(性ホルモンを使用)を用いて行われてきた。本研究では、精原細胞移植技術を用いてニジマス超雄(YY)を作出することに成功した。

本技術により、性転換魚を使用せずに超雄の作出が可能になった。この方法は他の養殖対象魚種への利用も可能と考えられる。

<sup>\*1</sup> Fisheries Division, Japan International Research Center for Agricultural Sciences

<sup>\*2</sup> Department of Aquaculture, National Taiwan Ocean University

<sup>\*3</sup> Department of Marine Biosciences, Tokyo University of Marine Science and Technology

<sup>\*4</sup> Shizuoka Prefectural Fishery Research Institute, Shizuoka

## 脱血処理がカツオの臭い成分に及ぼす影響

平塚聖一\*<sup>1</sup>・羽田好孝\*<sup>2</sup>・小泉鏡子\*<sup>3</sup>

日本水産学会誌, 82, 28-32 (2016)

船上で脱血した冷凍カツオの揮発性成分を非脱血群と比較した。脱血群は非脱血群に比べて、アルデヒド類とアルコール類が有意に少なかった。緩衝液中で血液と脂質を混合させると、アルデヒド類とアルコール類の生成が顕著であり、血液のみ、脂質のみではそれらはほとんど生成されなかった。脂質100mgに血液0-100 $\mu$ Lを反応させると、それらの生成は血液の濃度依存的に増加した。カツオ魚肉の臭い成分であるアル

デヒド類とアルコール類は、血液と脂質の相互作用により生成し、脱血処理はそれらの低減効果があるものと考えられた。

\*<sup>1</sup>静岡県経済産業部水産振興課

\*<sup>2</sup>静岡県経済産業部水産資源課

\*<sup>3</sup>静岡県水産技術研究所開発加工科

## 静岡県内浦湾沿岸におけるアオリイカの遊漁実態と釣獲量の推定

中村永介\*<sup>1</sup>・岡本一利\*<sup>2</sup>・今吉清文\*<sup>3</sup>・海野高治\*<sup>3</sup>

水産技術, 7(2), 59-68 (2015)

陸釣り遊魚は調査対象が不特定多数であり、場所や時期、時間帯が多岐にわたるため、その実態を把握することや、釣獲量を推定することが困難である。本研究では、静岡県沼津市内浦湾沿岸における水産重要種であるアオリイカについて、2011年5月25日から2012年3月5日までに実施した計147回の遊漁実態調査の結果から、漁獲時期、曜日、時間帯、雌雄、外套背長階級別の個体数を明らかにするとともに年間の釣獲個体

数および釣獲重量を推定した。6,545人の遊漁者のうち97%から回答が得られ、741個体の釣獲を確認した。年間の釣獲個体数は合計5,663個体、釣獲重量は合計3.2トンと推定された。

\*<sup>1</sup>静岡県水産技術研究所深層水科

\*<sup>2</sup>静岡県水産技術研究所浜名湖分場

\*<sup>3</sup>(株)玉野総合コンサルタント

## 静岡県のガンガゼ優占域におけるガラモ場の回復と拡大

### — 瀬切りと中層網の利用 —

山田博一\*<sup>1</sup>・伊藤 円\*<sup>1</sup>・秋田晋吾\*<sup>2</sup>・藤田大介\*<sup>2</sup>

月刊海洋, 47(7), 323-328(2015)

静岡県駿河湾奥の内浦湾沿岸では、近年ガラモ場の衰退が認められている。ガラモ場を回復させるため、同湾内の平沢地先で瀬切り方式によりガンガゼの侵入を防ぐとともに、マメタワラの母藻投入を行った。その結果、ホンダワラ類は翌年の春には瀬切り内で、3

年目の春には瀬切り内だけでなく、外側にも広く生育した。

\*<sup>1</sup>静岡県水産技術研究所伊豆分場

\*<sup>2</sup>東京海洋大学

## 静岡県興津川におけるアユ釣りの実態と経済波及効果

鈴木邦弘\*

アクアネット, 18(1), 44-48 (2015)

平成22~24年度の3ヵ年間で、興津川でアユを釣る遊漁者を対象にハガキによるアンケート調査を行い、釣りの実態、釣り人の意識やニーズ、経費、経済波及効果を推定した。興津川では、静岡県内及び関東圏の50~70代を中心とした男性が車で来訪し、食料やおとり鮎を静岡県内で調達して丸1日友釣りを楽しんでいた。彼らは、水質が良いことや天然アユが多いことなどの

自然的な親しみと数釣りを期待しているが、実際には不満を抱えて帰路に着く者も少なくない。それでも、年間7万人にも及ぶ釣り人により、年間3.2億円もの経済波及効果がもたらされ、静岡県の経済に興津川のアユ釣りが貢献していた。

\*水産技術研究所富士養鱒場

## 一都三県マサバ漁場一斉調査からみた伊豆諸島海域におけるイワシ類資源の変遷

長谷川雅俊\*

関東近海のさば漁業について（平成26年の調査および研究成果），88-97(2015)

1973～1994年の一都三県のマサバ漁場一斉調査のなかで、卵稚仔採集が行われていた。この調査ではサバ属卵稚仔以外の卵稚仔の計数も行われていた。卵稚仔調査から見た伊豆諸島海域におけるイワシ類資源の変遷は、マイワシ（～1980年）→マイワシ+ウルメイワシ（1981～1988年）→カタクチイワシ（1989～年）と

考えられた。イワシ類をはじめとした小型浮魚の資源動向を把握する上で伊豆諸島域の集中的な卵稚仔調査は重要であると考えられる。

\*静岡県水産技術研究所資源海洋科

## マサバ高水準期における伊豆諸島・静岡県海域におけるマサバ漁場について

長谷川雅俊\*

第63回サンマ等小型浮魚資源研究会議報告，194-203(2015)

マサバ太平洋系群が増加傾向を示す状況下で、今後、伊豆諸島海域で操業する火光利用サバ漁業が対象とするマサバ資源が増えたときの漁場形成の状況が注目される。マサバ太平洋系群の資源水準が高かった1980年以前の伊豆諸島・静岡県海域のマサバの漁場、分布について過去の資料を検討したところ、伊豆諸島・静岡

県海域において、マサバ資源高水準期には産卵期に親魚が漁獲されるとともに、産卵期以外（7～12月）にもマサバの分布が見られており、当歳魚から成魚までが分布していたことがわかった。

\*静岡県水産技術研究所資源海洋科

## 関東近海のさば漁業について（平成27年の調査および研究成果）通算48号

一都三県さば漁況検討会：千葉県水産総合研究センター，静岡県水産技術研究所，神奈川県水産技術センター，東京都島しょ農林水産総合センター(平成27年12月)

たもすくいの操業は、1月12日に三本でゴマサバを対象として始まった（ゴマサバ1夜1人236～517kg）。2月1日には水温18.2℃の三本周辺海域にマサバ主体の漁場が形成され、今漁期のマサバ初漁日となり（マサバ1夜1人563kg），2月中は1夜1人1,044～2,050kgで推移した。同海域には継続してマサバ漁場が形成され、今漁期の主漁場となった。しかし、4月中旬に同海域の水温は15℃台まで降温し、漁況は徐々に低調となった（マサバ1夜1人512～606kg）。5月も引き続き冷水域に覆われ、海面水温は16～18℃台で推移した。中旬以降はマサバ漁場は形成されなくなり、三宅島周辺海域でゴマサバを対象にした、たもすくい操業が行われる

ようになった（ゴマサバ1夜1人55～927kg）。北部海域は冷水域に覆われ、漁期を通して漁場は形成されなかった。漁期を通じたマサバCPUEは13.3トンで、比較に当たっては漁船規模の違いを考慮する必要があるが、豊漁だった1977～1981年漁期の平均には及ばないものの、近年では高水準であった2012年漁期（1夜1隻12.5kg）並であった。

棒受網の操業は、たもすくいに転向した時期を除き、年を通して行われた。2014年7月～2015年6月における静岡県主要4港への水揚量は、マサバ1,819トン、ゴマサバ6,927トンであり、漁場は三宅島周辺海域、銭洲周辺海域に形成された。